

令和3年度  
特別支援教育FSP(ファーストステッププログラム)  
オンライン授業改善セミナー

## 特性理解

北海道教育大学札幌校  
齊藤 真善

### 経験の浅い教員の特性理解を高めるためには

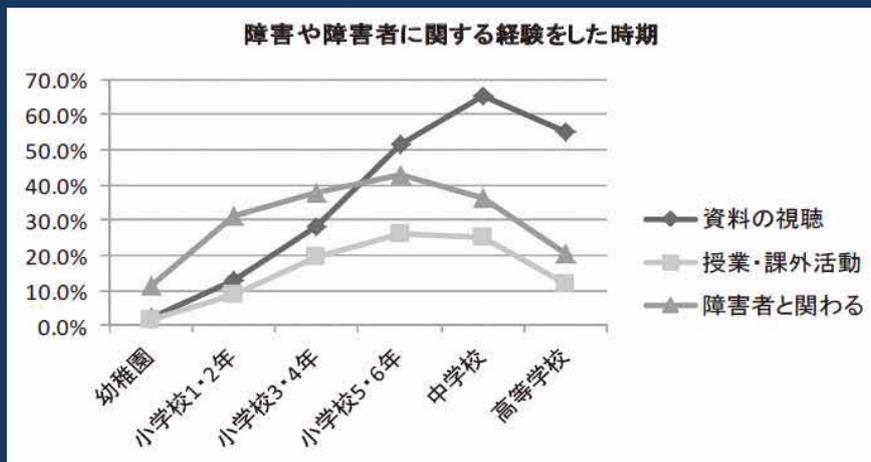
- ・知識をいくら増やしても、実践力は高まりません。
- ・新卒教員や経験の浅い教員自身が、主体的に学ぶ環境が必要です。
- ・本日は、教員の知識が実践力へとつながるための、環境(学校現場)に焦点を当ててお話ししたいと思います。

## 本日の内容

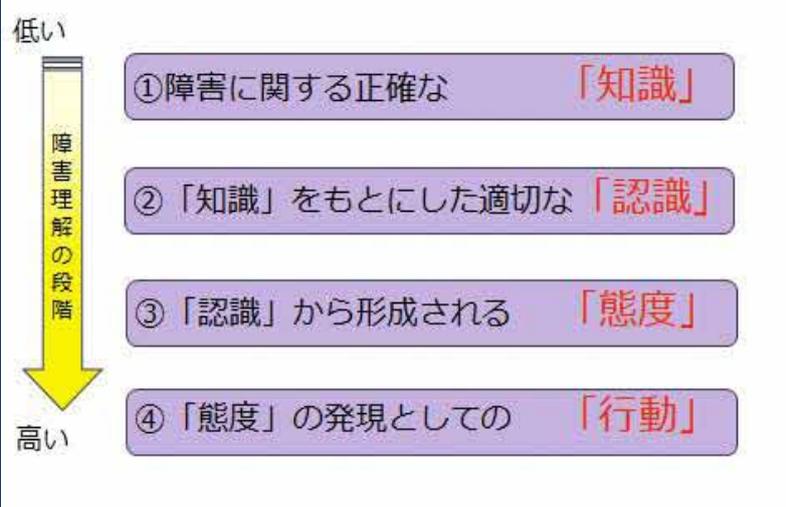
- (1) 新卒者の実態について
- (2) 教育現場の現状について
- (3) 事例の紹介
- (4) 家庭との連携について

## (1) 新卒者の実態について

## 教員養成系大学学生の 障害者との接触経験(田口ら 2012)

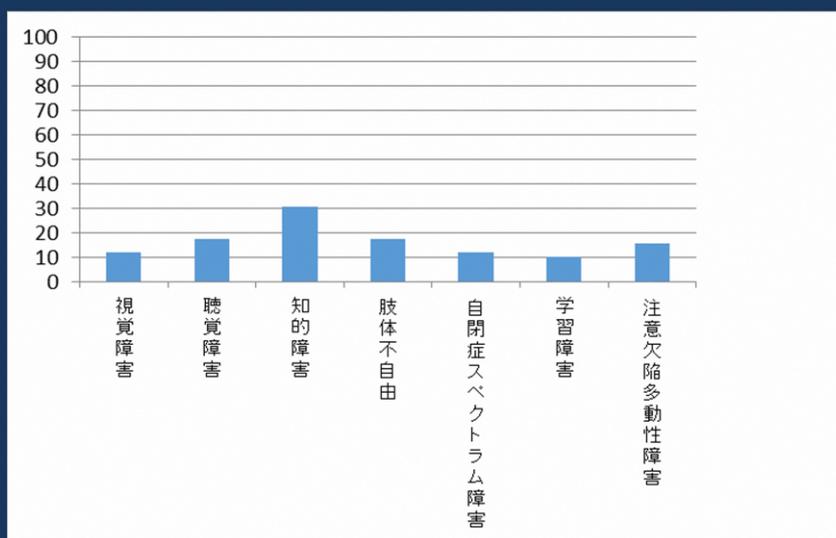


## 障害理解の四段階

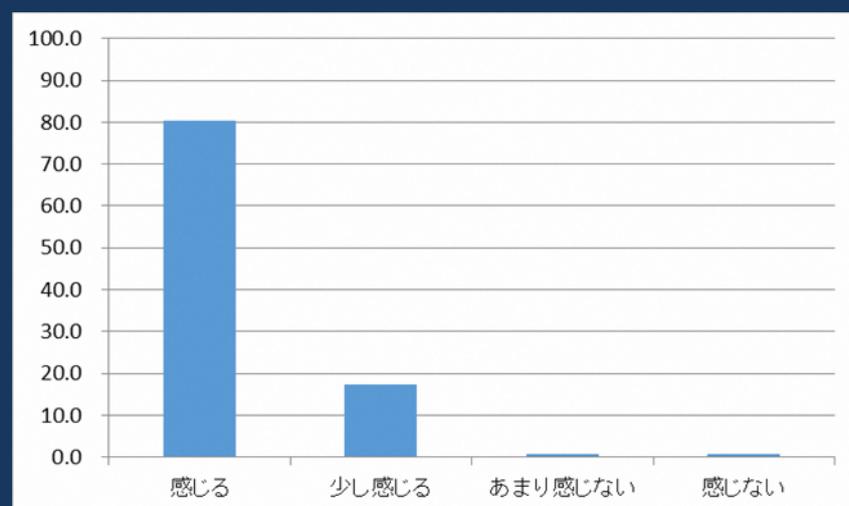


実践的教育者の  
養成が急務

## 学生のアンケート調査(対象291名) 障害種別の接触経験

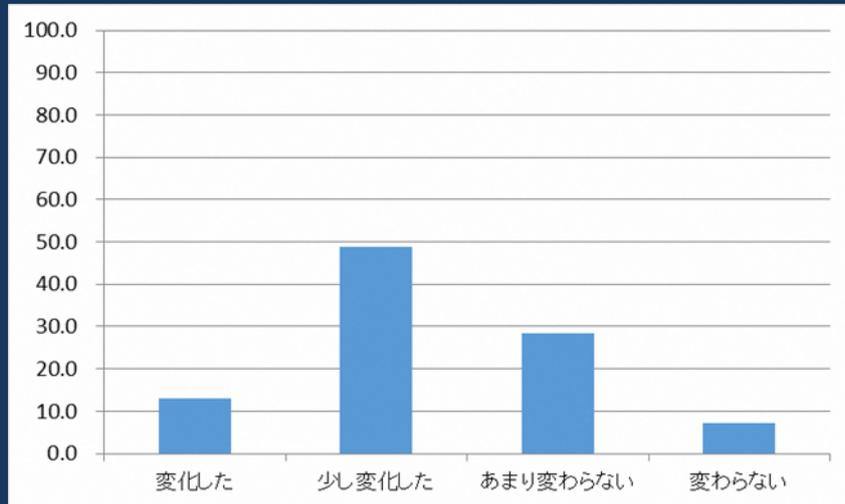


## 学生のアンケート調査(対象291名) Q特別支援教育を学ぶ必要性を感じますか？



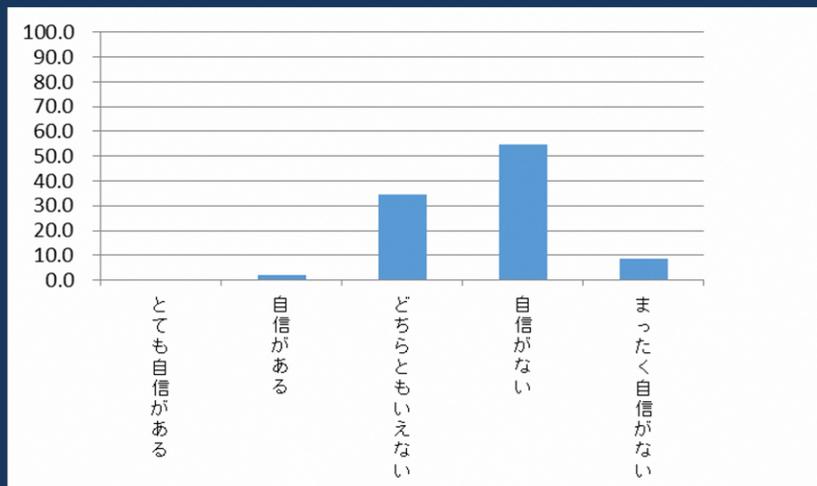
## 学生のアンケート調査(対象291名)

Q大学入学前と現在を比較して、障害のイメージは変化しましたか？



## 学生のアンケート調査

Qあなたの学級に発達障害の診断を受けた児童がいたら、指導することに自信はありますか？



## 「自信がない」と答えた理由

- ・知識が少ない。
- ・指導経験が少ない、もしくはない。また指導場面を見たことがない。
- ・知識はあっても、臨機応変な対応ができるかどうか不安。
- ・「普通の考え」以外、思い浮かばない。
- ・「当たり前の生活」しかしたことがない。
- ・障害を持っている人の感覚が想像できない。
- ・正解がないので不安。
- ・応用するには、指導の成功体験が必要だが、その機会がない。
- ・障害を持っている人の感覚が想像できない。
- ・集団のなかで指導するイメージができない。
- ・一人ではできないと感じた。周囲とのチームワークが必要。
- ・傷つけてしまうのが怖い。

など

## 「特別支援教育」(1単位)

### ～必修化の現状と課題～

- ・接触経験が少ないことの難しさ  
(早期から区別された教育が行われていることの弊害)
- ・学生にとって、新しい学問分野であることの難しさ  
(教育、医療、福祉、心理が主要領域)
- ・カリキュラムの一貫性の低さ  
(個々人の体験を意味づける機会がない)

## (2) 教育現場の現状について

### 現場の教師の声

- ・異校種間交流の意識が低く、時間が割かれていません。やってはいるものの形式的です。「自閉です」「3年生で診断」「親が暴れる」「不登校」などの記載ばかりそれぞれに対する実践が伝わってきません。組織としての対応が十分ではありません。
- ・教員の固定観念がきつ々あります。ブームとして広がったスペクトラムの考え方について「もう分かった」という声を上げる先生もいます。職員室内で、このことを日常的に話題にして、新しい課題を見出していかなければならないと思います。

## 現場の教師の声

- ・診断名があると、かえって教師の想像の範疇に留まることが多くその生徒の特性や発達課題についての分析がおろそかになることがあります。そのため、想定外のトラブルへの対応や保護者へのアプローチに失敗することがある。このような状況を防ぐには、入学前に、子どもや保護者との面談の機会を多く持つことが大切。子どものニーズの確認、学校体制の説明を丁寧に行わなければならない。
- ・生徒を知ろうとするために費やす時間が非常に短いことが課題である。問題のある子は他にもいるから、もしくは業務が忙しいからなどと、理由をつけて努力をしない教員が多いように感じる。

## 現場の教師の声

- ・学校教育の課題は、専門的知識を持っている教員が不足していることだ。教員の子供理解は上辺をみるだけ、上辺だけを見ざるを得ない状態にある。研修会を開いても、子どもの発達を理解するような内容ではないし、話せる教員もいない。
- ・個別の指導計画には、「~ができる」「~ができない」といった内容が多く、「こういうケースで、こういう対応をすところなる」といった記載が少ない。教師間の能力差が大きすぎる。活用するための質にはなっていない。
- ・教員は、日々の多忙な業務の中で、心の余裕を失い、柔軟な考え方が出来ない状態になっており、これを解消することが最大の課題です。

## 現場の教師の声

- ・定型発達者が集う学校では、「当然、当たり前だ」と思われている多くの事が、実はそうではないかもしれない。指導しようとしている事柄の目的を、言葉で論理的に説明できないのであれば、その指導内容に「合理性がなく」「説得力がない」のかもしれないということを、教師は考え直す必要がある。教員が正確に説明できない事柄や要求は、ASDだけでなく、教員も実は納得出来ていなかったり、必然性を自覚できていないのだから、ASDの反応はむしろ「正しい」ということを教員は認めなければならない。学校に求められているのは、「明確な説明力」や「合理的な根拠を持つ指導項目」なのであるが、実際、現在の学校はそれが整理できていない。

## 理解の意味

- ・ 自閉症スペクトラムについて詳しくなるのはとても私たちにとってありがたいことではありますが、実際のところ私たちの支援に自閉症スペクトラムの特性の理解が特段役に立つことはあまりありません。
- ・ 私たちが何かに惹きつけられてその場を離れられなかったり、手放せなかったり、そういうことが『こだわり』だと理解できたとしても、だからどうしたらいいのかまで、考えられなければ支援にならないのです。
- ・ 自閉性障害について詳しく知らなくても、私たちに何が足りていないのか、どうしたら私たちが苦しくなく問題をクリアできるようになるのか一緒に考えて欲しいです。

## 「発達」とは ～発達支援が意味するもの～

- ・「学校的なフレームのなかで、ひたすら力を身につけることを＜発達＞と呼ぶ人がいかに多かったことか」
- ・「**手持ちの力**を使い、いまのできなさを引き受けて、なんとかやりくりしながら、**自分の最大限をそのつど生きていく**」ことで、「**初めて、次の力は伸びてくる**」

(浜田、2006)

- ・子どもはやがて社会に出て自立するようになる。その時、子どもの「**doing (何をしたか)**」ではなく「**being (ありのまま)**」をコミュニティーの人たちが認めることで、子どもは健全な成長過程をたどって社会に出ることができる

(田中、2018)

### (3) 事例の紹介

## 事例紹介(小学校)

小学校入学に伴い、子どもは大きな環境の変化を体験します。家庭環境が主であった幼児期の生活から、ルールに則った集団生活への適応が課題となります。集団生活の背景には、様々な「暗黙の了解」があり、その理解の程度には個人差があります。

## 事例紹介(小学校)

Aさんは、現在小学1年生です。授業中、先生や友達の話をお聞きせず、常に発言しています。勉強への意欲は高く、学力も高い子どもです。先生が「友達が発表している間は話を聞こうね」とさりげなく注意すると、「はい」と素直に返事をしますが、話したいことが思い浮かぶと、友達の発表を遮って発言してしまいます。先生は、Aさんの発言のたびに授業が中断するので、困っています。休み時間中、友達と口論になりトラブルが生じるようにもなりました。トラブルになった経緯をお聞きすると、友達から聞く経緯と違っていることが多く、仲裁が難しいと担任は感じています。

## 事例紹介(小学校)

Aさんは、幼稚園時代、集団行動になじまず、一人遊びを好む子どもでした。ルールが明確な遊びには、参加できるようになりましたが、少人数で行う「おままごと遊び」などには、そばで見ているだけで加わろうとはしませんでした。年中から会話をするようになりましたが、やや一方的で、自分が好きなことを話し終えると、相手の話を聞くことなく、一人遊びに戻ってしまいます。一人遊びをしても、寂しがる様子はありませんでした。一人っ子であったため、親は同年齢との子どもとのやり取りについて課題があることには気づきませんでした。一人で遊べるので、むしろ手のかからない子どもととらえていました。

## 子どもは日々困っている

- ・学ばなければならないこと、身に付けなければならないことが、自分の能力を超えているとき、障害のある・ないに関わらず、子どもは「困った状態」に置かれます。
- ・発達スピード、得意・不得意には「個人差」があります。
- ・乗り越えるには、「環境調整」「大人の支え」が必要です。

## 問題の整理

### 本人

「勉強は大好き」  
「先生に質問されたから答えているだけ」  
「正解を言っているのに、どうして叱られるのか、わからない」

### 問題

- ・暗黙のルールを知らない。
- ・他者の感情や意図を読み取れていない。

### 担任・クラスメイト

「他の子の発言には興味がないみたい」  
「何度注意しても、行動が変わらないのはどうしてだろう」  
「自分ばかりしゃべってずるい」

### 問題

- ・普通と違う他者の心を想像することへの不安。
- ・普通からの逸脱への潜在的不安。



## 保護者との面談から

- ・言葉の遅れはなかったが、対人関係の遅れを健診で指摘された。
- ・その後、療育機関に通い、社会性の発達についてアドバイスを受けてきた。
- ・本人なりに成長してきていたが、入学時においては、同年齢の子どもと比べると、社会的に幼いところがある。
- ・家族とのコミュニケーションは、最近安定してきたが、知らない人とのやり取りになると難しい。
- ・入学後、どのような問題行動が起きるか、想像がつかなかった。誰に、何を願えばよいか不安だった。

## 支援の例

### 環境(担任)

(方針)

曖昧な指導方法をリストアップし、対応を再検討する。

(対応)

- ・クラス全員が守るべきルールを決めて、周知する。
- ・ルールが守れているときを見逃さず、できていること「承認」をする。

### 本人

(方針)

本人の意欲を尊重しつつ、適切な行動とその意味を具体的に伝える。

(対応)

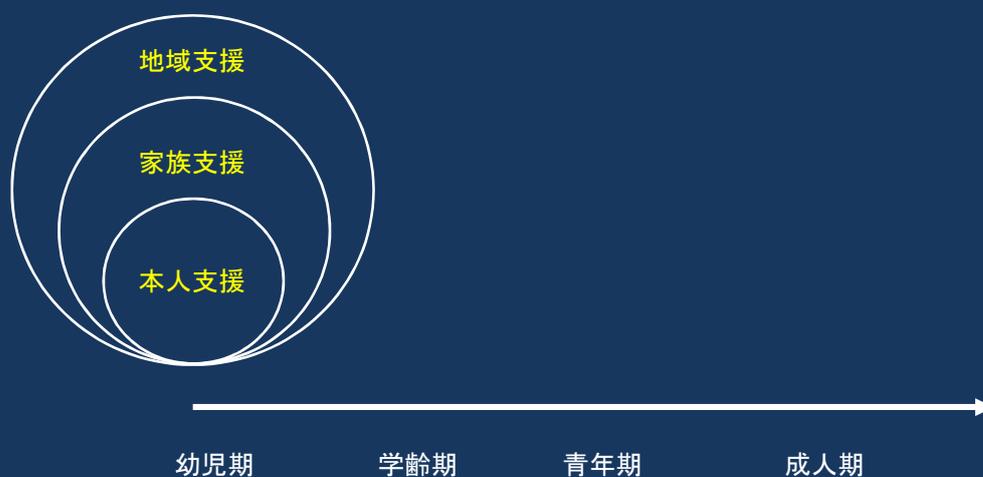
- ・授業の暗黙のルールを、文書にして教える。
- ・ルール通りに行動できた時は、「承認」をする(シール帳の活用:できたことの可視化)
- ・クラスメートの感情や意図を支援員が言語化して伝える。

## スキルアップのために

- ① 事例の子どもは、どのような暗黙の了解を知らなかったと考えられますか？  
→ 分析
- ② 暗黙の了解を、子どもにわかりやすく説明してみましょう。  
→ 行動 支援の実行
- ③ 学校にある他の暗黙の了解にはどのようなものがあるでしょうか。  
→ 般化、予測

## (4) 家庭との連携について

### 特別支援教育に関わる領域・期間





## まとめ

### ～経験の浅い教員の成長のために～

- ・新卒者の知識・スキルに応じて、担任する児童生徒の関わりの中で生じる体験の意味づけが必要。  
→日常的・継続的なSV
- ・新卒者のモデルとなる教育現場の構築のための継続的な取り組みが必要。  
→学校全体のスキルの向上
- ・家庭との連携のためには、様々な機関や支援者と連携し、情報を集め、教育の役割を検討する視点が必要。  
→教育内容や方法の妥当性の検討